

Local Dialect still used in Saku Area

Part 2

Fumio Kusama (Shinshu Junior College)

Abstract: This is the continuation of the interview with Mrs. Makiko Ide, a proficient dialect user in Kita-aiki Mura, Nagano-ken. We, the members of Shinshu Junior College Dialect Research Circle, had the interview on February 18, 2005. The purpose of our visit was to search for local words that are peculiar to Kita-aiki Mura, and to hear directly the local words spoken by the native user of the dialect. The interviewees' words have been left on record as faithfully as possible.

Keywords: Dialect, Kita-aiki- Mura, Saku-Area

方言探訪Ⅱ 佐久地域に残る方言の実地体験記Ⅱ

その二

草間 文男 (信州短期大学)

一 はじめに

信州短期大学紀要第二十巻に記した方言探訪記の第二部である。訪問者は、信州短期大学方言研究会の篠原昭、桼山幹男、草間文男の三会員であり、訪問先は、長野県南佐久郡北相木村に住み、地域の人たちから「まきねえ」と呼ばれる井出まき子さん宅である。先ず第一部に引き続き、懇談の中で触れられた方言の例を取り上げる。

また、この探訪の目的の一つとして、日常生活の中で実際に方言がどのように用いられているかを体験することをあげているので、殊更に方言として取り上げてはならず、また話者も方言という意識なしにごく自然に遣っていると思われる例を幾つか取り上げてみたい。

さらに、幸いにも、まきさんのはなしの中に、ある程度まとまった量の佐久の言葉遣いの特徴の伺える場面があるので記録として残したい。

なお、第一部、第二部に共通であるが、発言のうち「印」を付した部分は訪問者の発言であり、上田、長野の方言使用例は主として篠原会員の、そして佐久地域のものは桼山会員および草間の提供である。

二 話題となった方言の例

(紀要第二十号記載レポートに続いて)

⑬ 「でほうでもねえ」(ひどい、とんでもない)

まき子:「でほうでもねえ」なんて聞かねえ?

重人:「とんでもないことをしたものだ」つつことで「でほうでもねえ」とやらかしたもんだ」なんてゆったいな。

まき子…「でほうでもねえ」も方言？

—「でほうでもねえ」は佐久を代表する方言のひとつといわれているようです。

⑭ 「あちゃ」 (それでは)

まき子…「あちゃ」はどこでも遣う？

—上田の辺では「あちゃとだんべの国境」と言うんですが……。

重人… ここでも「あちゃごめんなんし」というように遣う。

—その「あちゃ」の意味がよく分からなくて……。北信の方へ行くと、

「あちゃあ」というのは私という意味で、女の人が遣うんです。

重人… それじゃ、ここの「あちゃ」とは違うね。「あちゃ これやら」つつてね。 「それではこれをあげましょう」という意味です。

⑮ 「おやげねえ」 (かわいいそうだ)

—「もうらしい」は遣いますか。

重人… そうらしいは聞くがもうらしいは聞いたことがない。「もうらしい」はまったく遣われていない。

—「この子はおつかあの乳が出なくて、もうらしい」などと遣うのだが。

重人… それじゃ、かあいそうという意味ですね。ここじゃ「おやげねえ」と言いますね。

—「おやげない」は上田でも遣いますね。だが、長野へ行くと無いです。

重人… 「おやげない」ではなくて「おやげねえ」は始終遣っています。

⑯ 「げえもねえ」 (無駄な)

—「げえもねえ」ということばはありますか

重人… ありますね。

—「もったいない」という意味で。

重人… 「もったいない」という意味ではないですね。「げえもねえ」は無駄なという意味で遣われるでしょう。

⑰ 「さらけおった」 (落ちた)

—柿の木から落ちた、試験に落ちたというのはなんといいますか。

まき子 「さらけおちた」。

—「さらけおった」といわないですか

まき子…「おちた」だね。……「おった」か？「さらけおった」かな。

—「おった」は長野県全体の方言ですよ。東京の人なんかは、「おった」というとやはり「枝をおった」というように遣います。

—「さらけ」はどういう意味ですか

重人… 「さらけ」は、ことばをつおくするもんだから、強調しているものではないでしょう。でも、「さらけ」は「落ちる」と結んで遣われるものではないでしょうか。

—他にあまり例がないようですね。「さらけ出す」は少し違うようだし。

⑱ 「しんの」 (くたびれている)

途中からはつ子さんが加わった席での話題

はつ子…佐久のことばには訛りがないですね。昔静岡の紡績へいつていたので、婆婆じゅうの人が来ていたもんで、東北の方の人も来ていて、あつちの方の人はうんと訛りがあるだよね。ここは訛りが少なくて、わりと標準語に近いだね

—ここを離れて県外に出たとき、ここでもしか遣っていないくて、向こうでは通用しなかったというようなことばはありますか。

はつ子…そうですね。疲れたときに、「ああ、しんの」、「しんのだ」っていうだよね。そういうとき、静岡の方では「かったるい」って言うんだよね。

—共通語では「しんどい」でしょうか。

⑬ 「いっける」、「えっける」 (乗せる)

―静岡へ行ったとき、笑われた言葉に「いっける」はありませんでしたか

はつ子…ありました。今でもね、バス旅行に行くようなときに、観光バスが来るでしょう。そうすると、ここは山奥だから一番先乗ると、「おい、その棚に俺のこの荷物えつけてくれや。」なんて騒いでやるでしょう。そうすると、バスが発車するとガイドさんがね、そういう言葉を遣ったといって笑うんですね。

まき子…ああ、「いっける」ね。あれも標準語じゃないだかい。

―「いっける」は典型的な佐久方言ですよ。

⑭ 「このけんまく」 (こんなに沢山)

―こんなに沢山、を何ていいますか。

重人…「このけんまく」でいいな。

―これは佐久でも遣う。「このけんまく」って。

―「こんねんまく」ともいいませんか。切原では遣っていたと思うのですが。

重人…「このけんまく」じゃないですか。まあ、人によっちゃあ、だんだん良い言葉に変えてるつつうか、ちよっと人によっちゃあ、しゃれたことばって言うか……

―「こんねんまく」と言う人が居るかもしれねえが、普通は「このけんまく」ということでしょう。

⑮ 「しらばんくれる」 (しらばくれる、しらばつくれる)

重人…「しらばんくれる」つつなことは遣いますか。

―ああ、「しらばつくれる」ね。「しらばつくれる」は標準語に近いでしょう。

―「しらばつくれる」、「しらつぱくれる」は共通語でしょうが、「しらばんくれる」というように「ん」がはいるのです。

―佐久では遣わないですね。

―切原あたりでも遣っていたので、南佐久では多いでしょう。

⑯ 「ちよつくら」、「ちよつくりや」 (ちよつと)

―ちよつとその辺まで出かけてくる、というときに何ていいますか。「ちよつくら出かけてくる」なんて言いますか。

はつ子…そうだな。「ちよつくら」とか……

―「ちよつくら」は遣いますか。そうですか。それじゃ「ちよいとこけ」という言葉はないですか。「ちよいとこけ 行ってくる」。ちよいとこけは小県にあるんですよ。あるいは、「ちよいとせえ、ちよいとさあ」もあるんです。「ちよいとせえ行ってくる」というように。

重人…「ちよいとこけ」や「ちよいとさあ」は言わねえですな。それが「ちよつくら」で、「ちよつと寄ってください」を、「ちよつくら寄ってください」なんてゆつたいな。

三 会話の中でそれと意識せずに使われた方言の例

二 では方言として意識して話題にされた例をあげたが、まき子さんがくり返し言われるように、共通語だと思って会話の中で自然に口を吐いてでたことばが、実は方言であったと思われる言葉をまとめておく。

方言 共通語

① 「いのきり」、「この日」 ○ このごろ、最近

② 「いいつ」 ○ 頃、あたり

例 あの人は去年いつから病院通いをしている。

ださい」つつつたら、

「どれにしようかな？」なんて、こんなように調べてね、それで、数だけお皿調べて出してね、盛り付けをしただよ。

「今日は、相当偉い人が見えたんですか」って言ったら、

「さあね」と言っただよ。

「ま、だれだっといういよね」と言っただよ、わたしがね。

盛り付けが終わったら、

「あんたたち、運びなさい」つつつて、向こうに居る人に言ったらね、——わたしも人使い荒いがこの人も荒いなと思っただよ——そしたら、一人、私は、ネクタイを下げている人は皆偉いと思っただよ。そしたらその一人の人が来て、それを黙って持っというっただよ。そして、もう一人の人がわたしをトントンたたいただよ。

「この忙しいのに」と思っ「なに」ってやったらね、……。それから水戸黄門になるだよ。

「おばさん、一体、この方をどなたと思いなさる。『おしん』の作者、橋田……」

「へえー」って。それで、こあつて（こうやつて）下げただよ。

下げたけど、水戸黄門のときだったらさ、知らなかった、存じなかったでいいが、今テレビで、あれされているに、知らなかったとも言えねえから、かあつて上げながらさ、

「実は、先生な、わたしは、おしんの小さいときに似ているって言われた。鼻がぺちゃんこで、ほっぺたが赤くって——」って言ったら、

「あら、ほんとだわ。あんた、小林綾子ちゃんの小さいときによく似ているわ」って言われ、それで帳消しになってね。

さて、だけど困ってね。……そして帰るときになってねえ、困って、山口のきのこやさま、あの家い（あの家へ）電話をしてさ、それで、きのこ頼んでね。

それで、わたしは化粧品っちゃあ人の古しか使って居なかっただよ。そして家の娘が、近いうちに婦人会の旅行があるつつつてね、「たまには新しいのを持っというっただよがいい」つつつて、それで、あたしに新しい化粧品をよこしたけど、あたし、それえ、チョコレートだと思っただい。どつ

かへ……あ、これだ。チョコレートの色に見えるに。そしてね、帰るときね、んじゃ、帰るときにチョコでも食べて行くようにつつつてやっただよ。

二、三ちしたらね、NHK東京ドラマ部、金澤何とかって書いたね、ドサンつような封筒が来ただよ。それから、あれっと思っ、こうに（こういう風に）見たら、あれっ、まあ、失礼な。わたしがせつかくれたチョコレートを、口も開けずに返してよこしたと思ってね。それで手紙読んだら、

「所々方々旅をするけれど、このたびのような旅ははじめてだ」って。

「それに、帰りに頂いたチョコ、あれは食べられなかった。なぜなれば中身は化粧品だった。さぞや、ご不自由をされたことでしょう」と。

それでね、えーっと思って開けたら、ふんと化粧品だった。それがちよつと縁でね、面白い縁だね。それから今だにお付き合いしているだけんどね。

去年来ただけ？ それで、こまつてね。突然来ただから。それから役場へ電話したらだれも居ないで。でも課長はいるというから、んじゃちよつから来てくれやつつて来てもらってね。

だから、あの人については失敗ばかりだけんど……。

だけどね、所々、方々歩いて、その人をこき使っ、終ったあと昼食代払っっていくなんつことがある？

そしたら、その事務長さんがね、

「一番の人が勝手に働いているにな、オレたちなんかそこに座っても居られないから、部屋で立ったり座ったりしていた」って。

五 まとめ

方言探訪の模様を二回に分けて記した。当日の懇談の全容を伝えるものではなく、会話の中から筆者の主観に基づいて話題を取捨したものである。幸い出席者の方言に対する旺盛な関心と、探究心を反映して、様々な話題が提供された。引用例について、若干の説明あるいは補足を行ってままとする。

二―⑬ 「でほうでもねえ」については、広辞苑では「出放題」の項で、「くちにまかせて、勝手なことをいうこと。でまかせ」として、「無駄やら洒落やら出放題なことをしゃべりながら」という例をあげている。肯定的な表現の「出放題なこと」と否定的に受け取れる「でほうでもねえ」の関係を説明するには、第一部で取りあげた「きょうこつねえ」における「ねえ」の解釈が適用される。この「ねえ」は打ち消しの無いではなく、強調の「甚だ……である」を意味するものであり「まったくでまかせな」という意味の、実感のこもったことばとなる。

二―⑭ 「あちゃ」については紀要二十巻の第一部でも触れたが、相木（佐久全般にも共通）で用いるものと長野等での用語とは、別の言葉であろう。長野などで遣われるという、女性が自分のことをいうときの「あちゃ」は、関西地方で用いられる「わて」、「あて」と同系列の語である。この語の発音には特別な強勢は置かれずフラットに発音され、「あちゃあ」と末尾に軽い「あ」の音が付くことがあると思われる。東京堂出版の全国方言辞典によると、わたしを意味する代名詞の「あちゃ」は富山県高岡在、出雲などで用いられているとのことである。

これに対して佐久では「あちゃ」と短く発音され、語頭の「あ」にかなり強いアクセントが置かれる。また、男女区別なく使用するのも特徴である。南佐久郡誌方言編では、南佐久に隣接する群馬・埼玉両県でも遣われてきた語であると述べている。また、前述の方言辞典でも、感動詞としての用法は埼玉県秩父郡、群馬、山梨、長野、新潟で見られるとある。

なお南佐久郡誌では「あちゃとだんべの国境」に関連してつぎのような話を紹介している。

一茶に有名な「この所アチャとソンマの国境」という俳句調の立言があることが知られている。信越国境の猿橋での作で、それぞれお国言葉の代表語をたわむれに詠んだものである。(二二頁)

「ソンマ」は新潟県方言で、すぐ、じき、の意であろう。猿橋は山梨県大月市にある有名な日本三奇橋の一つの猿橋ではなく、新潟県内の、信越国境

近くに幾つかある猿橋のいずれかを指すものであろう。いずれにしても、この句のバリエイションが他所にもありそうな気がする。

二―⑯ 「げえもねえ」、「げえむねえ」について

「芸も無い」は広辞苑によると、「工夫や趣向がなくてつまらない、おもしろみがない」という意味である。佐久の方言としての「げえもねえ」または「げえむねえ」は、「おもしろみがない」ものは利用もされないもので「無駄な」ということになるのであろう。さらに、無駄にするののもったいないことなので、芸も無いが、その意味に遣われることは理解できるが、実際の用法としては、北相木では「げえもねえ」が直ちに「もったいない」に結びつくものではないようだ。地域による微妙なニュアンスの違いが興味深い。

ちなみに、四賀村生涯学習推進本部発行の、方言集「松塩筑安曇地方の方言」おらほのことばで話しましよや」では、この言葉に「やり甲斐のない」「無駄なこと」という説明をつけており、佐久とほぼ同じ意味で用いられていることを示している。

二―⑰ 「しんの」の項で、共通語は「しんどい」であろうという意見が出され、なんとなく出席者の共通の意見のような形になったが、これは再考を要する。広辞苑第六版は、「しんどい」について、「京阪でいう。(心労の転か)くたびれている、つらい、くるしい」と記している。この語は、近年テレビジョンなどでの上方番組の隆盛にもなって広く理解されるようになったが、広辞苑によると関西の用語であり、共通語としては「しんどい」ではなく、「くたびれている」があげられることになる。

三 の例はすべて探訪当日の会話において井出さんたちが口にした言葉であり、日常的に、無意識に使用されているものであろう。

三―① 「このきり」の発音は「の」にアクセントがおかれる。

三―② 「去年いつ」の「いつ」は疑問の「何時」ではなく、去年ごろ、去年あたりのように、時をややばかして表わすのに遣われる。

三―⑤ 「えかい」は大きさを表わす俗語「でかい」の転用であろう。「でかい」自体は共通語と考えられる。

四 「まきねえの話」 まき子さんはたいへん話し好きで、ユーモアに富んだ談話の達人である。自分の失敗を見事に話のタネにして、聞き手の気をそらすことなく、笑いを誘う話術に魅了された。

佐久言葉が共通語に近いといわれる特徴は、この話の中でも十分に読み取ることができると考えられる。たとえば、名詞に関して言えばほとんどが共通語として理解されるものであり、佐久言葉らしさは、動詞や助動詞の、あるいは形容詞や形容動詞などの活用の部分にあらわれているものが多いようである。特に三―④に記した伝達動詞「〜と言った」が目立つ。

第一部に記した「きょうこつねえ」、あるいは、「いったくた」のような極めて特色のある言葉にはなかなかお目にかかれないようであるが、二〇〇五年二月に実際に語られた佐久言葉の一例としてまき子さんの話をそのまま記録した。

六 おわりに

北相木村を訪れ、井出まき子さん、重人さん達から、この地に今も生きている方言（俚言）についていろいろお聞きし、それについて調べてみて、一つひとつの言葉の背景にある歴史的、地理的な興行きや広がり、深さ・大きさを知り、驚きを禁じえなかった。

中世、近世に起源を持ち、全国的な規模で用いられた語、あるいは、この地域で生まれ育ったであろうと思われる言葉の姿が次第に明らかになってくるのは、実に興味津々たるものがあつた。懇談の中で、出席者に共通の思いとして何度も述べられたとおり、方言はまさに文化である。方言が消滅するということは、この貴重な文化が失われることである。

歴史的に、たとえ国土が失われても、言葉を失わない民族は、長い年月を生き延びるが、言葉を失った民族は滅亡すると言われる。同じように、地域固有の言葉、方言を失うことは、その言葉のあらわす生活様式や古くからのしきたり、催しなど、そしてそれにかかわる文化、思想を失うことになる。それは、社会の平板化、規格化を一層推し進めることに他ならない。

人は方言で話すとき和む。とはいえ、勿論私達の住んでいる地域の方言

を体系的に次の世代に伝えることは望むべくも無い。しかし、味わい深い、ひととひととの交わりに潤いや親しみを持たせる、そして何よりも、美しい言葉を、できるだけ多く伝えていきたいと願うものである。四賀村の方言集の「おらほのことばで話しましよや」というタイトルに強い共感を覚える。最後にこの訪問に協力頂いた北相木村教育次長 井出幸弘さん、方言について語りながら、食べると元気の出る「ウサギの草だよ」と言つて、ほとけの座の天ぶらをご馳走してくださった井出まき子さん、熱心に話題を提供してくださった重人さん、そしてはつ子さんにお礼を申し上げたい。

〔投稿二〇〇九年一月三〇日 受理二〇〇九年二月二五日〕

注

出席者

北相木村 井出まき子 (村の旅館の女将さん)

隣人 井出 重人 (八十歳を超える)

隣人 井出 はつ子 (途中から参加)

井出 幸弘 (北相木村教育次長)

信州短期大学 檜山 幹男 (生育地・生活圏 佐久市野沢・岩村田)

篠原 昭 (生育地・生活圏 長野市・上田市)

草間 文男 (生育地・生活圏 佐久市臼田切原・小諸市)

参考文献

広辞苑(第六版) 岩波書店 二〇〇八・一・一一

南佐久郡誌(方言編) 郡誌刊行会 一九九六・五・二

全国方言辞典 東京堂出版 一九五一・一二・二五

おらほのことばで 四賀村生涯学習推進本部

話しましよや 二〇〇二・一〇